

ART KISS

LETTER Vol. 74

2015 秋



(コウカロイド)2014年
人型アンドロイド・大塚大学石塚浩研究室開発

巻頭言

ベネチアと猫の楽園 マルゲラの森の現代アート

かつては海軍力と交易による富により「アドリア海の真珠」として君臨し、今でも世界を代表する「水の都」と呼ばれるベネチアでは、何千という中世以来の壮麗な建築群が水辺に映えています。車も近代建築も全く見られないこの島には、その歴史的古さと対照的に、美術や建築、映画等、世界の最先端を行く大規模な芸術祭が開催され、尖鋭な芸術が歴史都市を活性化しています。美術部門の2015年ベネチア・ビエンナーレのテーマは「全世界の未来」であり、キーワードはディアスポラ、亡命、難民等、極めて今日的な問題提起をしていました。また地球環境にも注視した、美しい見事なインスタレーションも見られました。

このベネチア本島から一直線のリベルタ橋を渡り、イタリア本土の人口に、地図で見ても一目でわかる、蝶か星のような異様な形をした地域があります。それが運河と濠を張り巡らした要塞、フォルテ・マルゲラです。19世紀初めに造営され、陸からの攻撃からベネチアを守る要塞でしたが、ここは今では樹木が茂り、水辺には多くの魚が群がるベネチア市の広大な公園となりました。現在、ここでは多くの美術家や音楽家、演劇関係者が集まり、倉庫や司令塔であった建物は展示会場、小劇場、音楽会場となり、兵舎はアーティストのレジデンスとなりました。かつての軍事拠点は、今や芸術文化の拠点に変容しつつあり、ベネチア市が、本島以外にも現代アートによる都市再生に力を入れているのが注目されます。

このフォルテ・マルゲラを歩いていると、各々形の違う手作りの小屋が数十個、円形を成して置かれ、まるで野外劇場のような樹木に囲まれた広場を見つけました。それぞれデザイン異なる小屋には、一匹ずつ猫が住み、のどかな社会を形成しているのです。空気が澄み、緑豊かな小道を行けば、所々で猫と出合い、猫を支援する看板も見かけられ、動物との共存が、この場に獨創性を生み出しているのです。ここは現代アートの森であるばかりか、猫の楽園でもありました。

熊本市現代美術館館長 桜井武

詩の朗読会

くまもと詩の朗読の会共催の自作の詩の朗読会です

詩の朗読会 第141回

テーマ「メッセージ」

2015.8.27



戦後70年、高校野球100年という節目の年である2015年8月のテーマは「メッセージ」です。3名の飛び入り参加の方にも詩を披露していただきました。

詩の朗読会 第142回

2015.9.17

テーマ「缶詰」

今回は10名の方が自作の詩や俳句、短歌などを朗読されました。「缶詰」というテーマから生まれてきたイメージは、缶の音の記憶、開けた缶詰で指を切った時のこと、「ぴつちりと閉じた缶詰」自らの内面に閉じこもる人の姿など様々。その他、開催中のポップ・アート展を観て詩作されたという方や、秋感じる（空き缶詰）と音をかけたもの、実際に空き缶詰を蹴るといった演

出、缶詰会社の宣伝のように仕立てた詩、硬い缶のもつ鋭さのような強い口調で作られた詩などが発表されました。身近な存在である缶詰から生まれた多様な表現が非常にユニークな会でした。(K・O)



【参加人数10人】

CAMKEESの活動

美術展ボランティアCAMKEESのメンバーによる活動紹介

CAMK読みがたり第72回

2015.8.15

テーマ「なつやすみ」



今回の読みがたりのテーマは「なつやすみ」。2才から小学校低学年までの子どもたちが参加し、にぎやかな時間を過ごしました。絵本「花火のよるに」や「ひとくちばく

り、手あそび「ももすいかなしパイナップル」、さつちゃん一家が登場するパネルシアター「だれのせんたくもの?」をご紹介しました。また紙芝居「おばけの森」は、森にすむおばあちゃんの家に遊びに行くことになったものの、その森にはおばけが住んでいて...というお話。いくつにも分かれた道を参加者のみんなで選びながら進んでいきます。途中でひとつめ小僧や大きなへびが登場すると、みんなハラハラドキドキでしたが、最後まで一緒に協力し、無事に森のおばあちゃんの家にとどりつくことができました。(H・Ts)

【参加人数38人】

ホームギャラリーからのお便り

ホームギャラリーからおすすめの一冊をご紹介します。

VOL.27

『0円ハウス』



著者:坂口恭平
出版:リトルモア, 2004年

現代美術家の坂口恭平さんは、人々への観察や聞き込みから、ライフスタイルの多様性を紹介するような著作が多くあります。その中のひとつが、『0円ハウス』です。この写真集では、路上生活者の住居の写真に作家の短いコメントが添えられ、巻末には作家のドローイングも収められています。やはり驚かされるのは、その住居の多様さと自由さです。なかには、階段を柵のように扱った家具を配置したり、自分の陣地を拡大させるように物を置いたり、板を整然と並べつなぎ合わせ美しい外壁をつくっているもの、月に一度の撤去のために移動しやすい形になっているもの

現代美術家の坂口恭平さんは、人々への観察や聞き込みから、ライフスタイルの多様性を紹介するよう著作が多くあります。その中のひとつが、『0円ハウス』です。この写真集では、路上生活者の住居の写真に作家の短いコメントが添えられ、巻末には作家のドローイングも収められています。やはり驚かされるのは、その住居の多様さと自由さです。なかには、階段を柵のように扱った家具を配置したり、自分の陣地を拡大させるように物を置いたり、板を整然と並べつなぎ合わせ美しい外壁をつくっているもの、月に一度の撤去のために移動しやすい形になっているもの

CAMK読みがたり第73回

テーマ「外国のおはなし」

2015.9.19

今回は未就学の子どもたちを中心に19名が参加しました。絵本『でっかいあかいバスがきた』は、イギリス・ロンドンで見かける赤い二階建てバス「ダブルデッカー」が主人公の絵本。またアメリカのオバマ大統領も子どもの頃に読んだという絵本『GOODNIGHT MOON (おやすみなさいおつきさま)』も日本語で紹介されました。『お月見』の季節ということで、『お月さま』が登場する作品が多く紹介されました。手袋人形劇「おつきさまみてる」では、お供えのお団子がおいしそうに見えたのか、思

もありません。フレキシブルな私たちは、普段使う道具や空間は単一ではなく複数の機能を持ちうることを教えてくれます。

加えて、家主が写真に登場しないことによつて、住まいや物の配置の雰囲気から、住民とその人柄や暮らしを無限に想像することが出来ます。ドローイングからは、いかに住民の工夫によつて生活と空間の機能とが不可分につながっているかが読み取れます。この本が焦点を当てているのは、自分の住まいを身体の延長線上と捉え、工夫し続ける姿勢とその空間といえそうです。

さて、熊本市現代美術館で坂口さんが展覧会を行ったことがあるのを「存じ」でしょうか。その「坂口恭平 熊本0円ハウス展」を契機に、2009年に廃材を集めて0円で制作した移動式の小さな住居である《坂口自邸》(当館収蔵作品)が制作されました。その後、東日本大震災を経て、彼は移動式の住居「モバイルハウス」も複数制作し、建築や土地所有のあり方に疑問を呈しています。その姿勢は、本書にも共通しています。現在への彼の問題意識の連なりを「0円ハウス」から辿ってみてはいかがでしょうか。(A・M)



わずばくつとポラントニアさんのお団子手袋をほおばりに来た、食いしん坊のおともだちも。この他にも、絵本『できるかな?あたまからつまさきまで』では、キリンのように首

をぐいんと伸ばしたり、フラミンゴのように片足をあげてみたり、動物のマネをできるかな?と、皆で体を動かして楽しみました。(H・Ts)

【参加人数19名】

街なか子育てひろば

子どもたちのためのイベントを開催しています

親子でたのしみおもちゃづくり

2015.8.20



8月のワークショップでは、家にある身近な材料を使って3つのおもちゃを作りしました。1つ目は、牛乳パックとストローを使った竹とんぼ。牛乳パックのプロペラに、ペンで自由に色をつけ、軸になるストローに差し込み

ます。親子で会話をしながら色を塗り、少し難しいホチキス止めはお母さんにしてもらいながら、一人一人絵柄の異なる竹とんぼが出来上がりました。竹とんぼを高く飛ばしながら「とんだよ」と子どもたちの元気な声。続いて、竹とんぼと同じ材料で笛を作りました。小さく切った牛乳パックを四角い筒状に折り曲げ、ストローを上に取りつけると完成です。とても簡単につくりなです。きれいな音が鳴り、いろんな歌が奏でられました。3つ目は、新聞紙で作るおもちゃです。細長く切った新聞紙を糊付けしながら1本の長い帯を作ります。それを腹腰に折っていくと、坂をバネのように転がるおもちゃが完成しました。おもちゃを作りながら、糊が付きすぎた所には小さくちぎった新聞紙を貼り合わせて他の部分とくっつかないようにするなど、子どもたちが色んな発見や工夫をしている場面が見られました。(Y・M)

【参加人数27人】

街なか子育てひろば イベント 親子ふれあい遊び

2015.9.17

9月の街なか子育てひろばのイベントとして「親子ふれあい遊び」を開催しました。講師の方々のパネルシアターなども交えながら、親子でできる手遊びや歌遊びをしました。「どんぐりころころ」や「野菜のうた」などのお歌遊びから始まり、みんなの集中力がぐっと上がったのがパネルシアター。いろんな色の四角から、かくれていたものが出てきます。赤い四角からはりんご。黄色からはバナナ。「ではピンクは？みんなで呼んでみよう」と声かけがあると、「出てこい出てこい」とみんなで呼んでいきます。出てきたのはうさぎ！びつくりした子どもたちは思わず嬉しそうな声を上げたり、パネルに近づいたりしていました。「お弁当箱のうた」では、フェルトでできたおかずを子どもたちが一つずつもらって、歌の中で「りんごさん」「れんごん」「んざーん」と呼ばれると、呼ばれると持つて行って大きなお弁当箱の中に貼っていきます。他にも、パネルシアターの「さるかに合戦」やグループでの遊びもあり、最後にはみんなが歌にのせて



て手話も楽しみました。子どもたちが元気に声を出したり動きまわったり、全身で楽しんでる姿が印象的でした。(Y・M)

【参加人数32人】

月曜ロードショー 上映報告

毎週月曜日14時・18時より 無料 定員：90名

上映リスト(7/26~10/12)

7月27日	(イベントのためお休み)
8月3日	(イベントのためお休み)
8月10日	「禁じられた遊び」1952年 フランス映画 86分
8月17日	「スイング・タイム」1936年 アメリカ映画 104分
8月24日	「オルフェ」1949年 フランス映画 95分
8月31日	「ハリケーン」1937年 アメリカ映画 103分
9月7日	「プルーフ・オブ・マイ・ライフ」2005年 アメリカ映画 100分
9月14日	「ジャズ・ミー・ブルース」1991年 イタリア映画 112分
9月21日	「朱花の月」2012年 日本映画 91分 *日本語字幕付き
9月28日	「ジュア・シング」1985年 アメリカ映画 95分
10月5日	「ザ・チャンプ」2007年 アメリカ映画 112分
10月12日	(イベントのためお休み)

アートえんにち お絵描き道場

2015.8.23



今年も夏の恒例イベント、アートえんにち「お絵描き道場」を開催しました。小学1〜6年生約40名が、ホームギャラリーに集合！広々としたブルーシートの上で、子どもたちは4チームに分かれ、キャンプに花火大会に海水浴；それぞれの夏休みの出来事を振り返りました。なかなか絵が進まない子は、補助として参加してくれた学芸員実習中の大学生のお姉さんと一緒に構想を練っていました。ホームギャラリーの本や描きたいポスターを参考に、みんな一生懸命。中には「2枚目を描きたい！」なんていう子も！普段話す機会のない大学生のお姉さんたちを前に、はにかみながらも楽しそうなお姉さん。キラキラとした夏の思い出をお家に飾って、さらに楽しんでもらえたらと思います。(R・O)

【参加人数38人】

アートえんにち CAMK人形劇20「ピノキオ」

2015.8.29



年に一度のお楽しみ、「劇団ばれっと」さんによる人形劇。今年「ピノキオ」を上演しました。夏休み最後の週末だった当日は、雨にもかかわらずホームギャラリーいっぱいのお客も子どももコミカルな人形の動きにきげです。ピノキオが嘘をついて鼻が伸びてしまう場面では「うそつきー」と声を上げたり、お父さんをクジラのお腹のなかへ探しに行き、もうすぐ再会！となる場面では、ピノキオに「うしろー！」と一生懸命知らせあげたりするなど、子どもたちからのあたたかな声援が響き、会場一体となって楽しんでいました。(A・M)

【参加人数200人】

「ポップ・アート1960's→2000's
From Misumi Collection」展

ポップ・アート展

プレママ&ファミリーツアー

2015.8.1



ポップ・アート展の「プレママ&ファミリーツアー」を開催しました。今回は6組のファミリーが参加。チャック・クロース作品の前で、「この作品は身体の一部で描いているけど、どこだ

と思う？」というクイズが出されると、作品にくぎ付けになって考えたり、身近なものがいとも違う大きさで映りこんだデイヴィッド・ラシャベルの写真作品を不思議そうに眺めたり、親子で楽しんでいただきました。(A・S)

【参加人数18人】

あなたもウォークホール

2015.8.16



ポップ・アート展の関連プログラムとして、アーティストの林浩さんや講師に招きシルクスクリーンワークショップを開催しました。シルクスクリーンで自分の顔をもちろにポスターをつくりま

す。最初に先生のお手本を見てから、さっそくグループで挑戦です。刷る準備ができたから、絵の具を混ぜて好きな色を作って、スクリーンにのせて、へらで伸ばすと紙にインクが刷られていきます。同じやり方でど

んどん作って、インクが乾いたら、次はその上にペンやクレヨンで描きこみます。輪郭に違う色をのせて変化を出したり、お化粧のように塗ったり、失敗も生かして絵を描きこんだり、色んな工夫をしています。どんな並びにするかを考えながら、貼りあわせて大きな一枚に。それを下通の旧ダイエー前の工事中のフェンスに貼っていきました。色とりどりの顔で、通りがより鮮やかに彩られました。(A・M)

【参加人数9人】

ポップ・アート展

CAMKレクチャー・カレッジ

2015.8.22



担当学芸員によるポップ・アート展のレクチャー・カレッジを開催しました。初めに「ポップ・アート」って何？という導入から、その発祥や特徴、代表的なアーティストなどを解説しました。その他「展覧会ができるまで」と題して展覧会の構成や展示上の工夫についてお話しし、「版画のつくり方」としてシルクスクリーンの製作過程を、映像も交えながら紹介しました。

【参加人数30人】

村上哲講演会

2015.9.5

ポップ・アート展の関連イベントとして、熊本県立美術館学芸課長の村上哲さんをお迎えし、講演会を開催しました。リキテンスタインやウォール、アメリカの版画工房についてのお話から、今回のポップ・アート展で展示中の《泣く女》《船上の女》などの熊本県立美術館の版画コレクションについて語っていただきました。またポップ・ア



トの他、アメリカのムーヴメントとなった抽象表現や、一コマを切り取ったという点でポップ・アートと似た関係を持つ「スーパー・リアリズム」についてなど、美

【参加人数30人】

ポップ・アート展

商店街ナイトツアー

2015.9.12



日頃お世話になっている、地元商店街の皆さんを対象としたナイトツアーを行いました。営業終了後の遅い時間にも関わらず、多くの方に参加いただき、「自分も絵を描きたくなった」「話題がはずんだ」などのお声をうかがいました。今後このように、美術館と商店街を結び試みを継続していければと思います。(A・S)

【参加人数95人】

来場者2万人達成!

2015.9.25

ポップ・アート展はおかげさまで来場者2万人を達成しました。2万人目となったのは、熊本県立黒石原支庁支援学校高等部在籍する生徒さんら総勢21名の皆さん。校外学習の生徒さんを含め、保護者の方と支援学校職員の方のご来館でした。引率された先生からは「びっくりしました。特に3



年生は最後の校外学習だったので、良い記念になりました。」との嬉しい声も。当館学芸員によるガイドも皆さん興味深そうに聴かれています。生徒さんのお一人は、ロイ・リキテンスタインの《筆触》がお気に入りとのこと

【参加人数30人】

G III

ギャラリーⅢ(GⅢ)は、熊本、九州のアーティストを紹介し、応援していくスペースです

GⅢギャラリー「ARTISTS IN DECKS」展

2015.8.8-10.12



九州の注目若手アーティストを紹介する展覧会「ARTISTS IN DECKS」第3回となる今回は、川嶋久美・小林駄々・宮本華子・富永ポンドの4人の作家をご紹介します

介しました。初日の8月8日にはアーティスト・トークを開催し、それぞれの活動や今回の出品作について語っていただきました。

トップバッターは河原町を拠点に活動する川嶋久美さん。これまでの作品・活動の紹介に続いて、自らの記憶をテーマとして今回制作した教室型のインスタレーション《まどろみの放課後》についてお話しいただきました。うつろっていくのが惜しく感



近年は結婚とそれに関わるものごとくに強い関心を向け、本展でもウェディングドレスを用いた作品を出展。父と向き合うための作品をはじめ、宮本さんにとって作品



川嶋さんと同じく、河原町を中心に活動している小林駄々さん。本人同様に髪の毛の長い女性を描いた作品が多いため、それは自画像なのかと思いきや、実は自分が綺麗だと思ったアイドルなどをイメージして描いているとのこと。自分の感情をベースにして制作し、目を背けたくなるような人の醜い感情や欲望をそのまま描き出そうとしているという小林さん。それらの感情の混ざり合いが、かわいさと不気味さと迫力を同居させた独特の画面につながっているようです。

第26回熊本アートパレードで「審査員特別賞」を受賞した宮本華子さん。父との軋轢とその葛藤を出発点に制作してきたこれまでの作品について、構想段階の関心の移り変わりにも言及しながら丁寧に紹介していただきました。

制作はコミュニケーションのための手段でもあったようです。

最後は、木工用ボンドで絵を描く世界で唯一のボンドアーティスト、富永ボンドさん。自身が目標としていることと、そのためにに行っている活動の数々をテンポよくご紹介してくれました。アーティストを増やし、シーンを活性化させる。そのためにライブイベントを行い、人々に興味を持ってもらう。アートスタジオを運営し、活動の場を作る。医療とアートをつなぎ、人の生活を豊かにする。そのために多くの福祉施設などでアートセラピー・ワークショップを行う。明快な目的意識と縦横無尽の行動力が、力強く伝わってくるプレゼンテーションでした。(G・S)

アーティストインデックス展 富永ボンドライブイベント

2015.8.8-9



8月8・9日にかけて、富永ボンドさんによるライブイベント「富永ボンドの巨大キャンバスにアクリル絵具と着色したボンドをつかって制作。迷うことなく筆を進め、一色ずつ順番にキャンバス全体に散らしていくボンドさん。時間とともに画面はみるみる変化していきます。普段、美術館で目にするのは完成した作品ですが、今回のようにアーティストが描いていく過程を生で観るのにはまた別の楽しさがあります。展示を覗いた方々も、移り変わっていく画面の様子を興味深そうに眺めていました。着色が終わると、いよいよ黒いボンドで縁取りして仕上げに入ります。このボンドによって、絵の印象はさ

らに大きく変貌を遂げていきます。最終的に今回の制作で使用したボンドはなんと合計約20本(一)。本作はインデックス展出品作としてそのまま会場で展示され、来場者の目を驚かせていました。(G・S)

アーティストインデックス展 宮本華子公開制作

2015.8.8-10.12



インデックス展出品作家の宮本華子さんが会期中にアートスカイギャラリーにおいて、ウェディングドレスとカーテンを用いた作品(へしらが消えていく)の継続公開制作を行いました。父親との軋轢がもとで始まったこの作品、純白のドレスと館内に優しい光を届けるカーテンは幸せの象徴のようにですが、近づいてよく観てみると、「オレのため」という言葉が無数に刺繍されていて、遠目の美しさとのギャップに驚かされます。作家の手でだんだんと増殖していくこの刺繍。カーテンの前では多くの方が足を止め、まっ白な生地が「オレのため」の文字で埋め尽くされていくのをじっと見つめています。(G・S)

熊本市現代美術館 開館13周年記念イベント

2015.10.12

10月12日は熊本市現代美術館の開館記念日です。13周年にあたる今回は、「STANCE or DISTANCE ?」展の無料開放のほか、インデックス展の出品作家4名がびげす広場で多彩なアートイベントを開催しました。川嶋久美さんの露店「幻」では、水に浮かぶ人(が描かれたプラバン)を街なかの風景が描かれた金魚すくい用のポイですくいあげます。どちらも熊本の街と人。見慣れ

た場所を見つけて「知ってる!」と声が上がること。大人気すぎて、終盤は浮かべる人型が足りなくなるところでした。

小林駄々さんのワークショップでは、あらかじめ顔だけが描かれたトートバッグに自分の思い描く美少女を描いていきます。難しいかと思いきや皆さんすらすらとペンを走らせ、個性豊かな美少女を完成させていました。



宮本華子さんの参加型作品では、犬小屋のなかに入って「自分にとって家とはなにか」を書き込みます。不思議と居心地のいい空間に、ゆっくり体験される方も多くいらっしゃいました。

富永ボンドさんのブースでは作家のライブイベントに加えて、小さなボンドアート作品を自分で作れるワークショップも開催。初めてボンドを画材に使い、大人も子どももじっくりと思い思いの作品を完成させていました。

オリジナルぬり絵コーナーには、インデックス展出品作家のほか、「STANCE or DISTANCE ?」展出品作家の加藤泉さんのぬり絵も登場しました。こちらも、大人もお子さんと一緒になって熱中するほどの盛況ぶりでした。

たくさんの方にイベントを満喫していただき、インデックス展は開館記念日の盛況とともに閉幕しました。(A・M)

ART DE GYAN

アート・どぎやん。

*熊本弁でアートはどうなの?という意味です

本号では、当館学芸員実習生が実習課題の一つとして執筆した取材記事を、通常記事と合わせて掲載します。

三宅純男

世界の昆虫コレクション展

島田美術館
熊本市西区島崎4・5・28
TEL 096・352・4597



8月終盤、島田美術館で「世界の昆虫コレクション展」が開催された。東

海大学の三宅純男さんの昆虫標本コレクションから世界各国の昆虫たちが展示されていた。標本ケースが1000以上並び様は壮観であるが、目玉は何と言っても青い羽が美しいレテノールモルフオだろ。会場では東海大の学生による「むし探しゲーム」が行われており、子供たちは夢中になっていた。これは昆虫の一部の写真から、どのケースの昆虫なのかを探しだすゲームで、全部で16問ある。全問正解する子どもたちも多いそうだが筆者は3問不正解であった。昆虫の美しさと知識を同時に学べる展覧会であった。(古川真紀/米里茶葉亭)

哲人工房作品展

暮らしの中に鉄の息吹を

熊本県伝統工芸館
熊本市中央区千葉城町3・35
TEL 096・324・4000



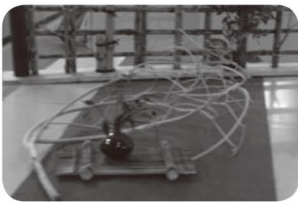
上益城郡御船町で鉄工所「哲人工房」を営んでいる今

井敏史さんの作品展。展示室には鉄で作られた温かみのある作品が並ぶ。ハート型のポストや、かたつむり、羊といったオブジェには鉄のイメージからはかけ離れたかわいらしさが感じられる。また、植木鉢や苔玉と組み合わせた作品には、鉄の艶やかさが緑を引き立たせるような印象を受けた。肌を馴染むその品々は、機械を使用せずバーナーで鉄を熱し、自らの手でつくりだしているという。ポストや表札、一輪挿しといった実用品も並び、同時に販売もしている。日常を彩る手作りの鉄製品で、日々にはアクセントを加えてみてはどうだろうか。

(岡本桃香/山下真由美)

流木の宴

熊本県伝統工芸館



岩下哲郎さんによる流木と生花を組み合わせた作品展「流木の宴」の第二回展が、伝統工芸館で開催された。天草の海で出逢った流木は、山

2015.8.25-30

長旅を終え、作品として新たな息吹を吹き込まれる。優しく繊細で柔らかいもの

2015.8.25-30

や、荒々しく大胆で勇ましいものなど、自然の様々な表情を目にすることができているのが、流木の魅力の一つ。山で育った木が、川と出逢い、そして人と出逢う。そこに岩下さんが花を添えることで出逢い、宴ははじまる。

(弓場綺良々/池畑花観/徳永登見代)

BLUEFLAGX KUMAMOTO

ギャラリーカフェアーク

熊本市中央区上通町5・46
TEL 090・6088・0219 (BLUEFLAG用)

2015.8.25-30

レビューA

フルオーダーで理想のシャツを提供する「BLUEFLAG」による展示販売会。カジュアルからフォーマル、レディス・メンズまで幅広く手掛けており、襟やカフスなど、細かなところまで自由にカスタマイズすることができる。500種類以上ある生地は、その地は、ほとんどが国産で、柄、素材、色も豊富に揃い、こだわりぬいた選択をすることが出来る。シャツワンピースなど、自由なアレンジもデザイン次第で楽しめる。カフェが併設され、和やかで明るい雰囲気の中、じっくり自分だけの一枚を選ぶことができる心地よい空間であった。

レビューB

「BLUEFLAG」によるシャツの展示販売



(藤崎華衣/松田千賀子)

売会。注文、製作、納品のサイクルに合わせて月に一度開催される。約300点のシャツが展示され、生地サンプルを含めると500種類以上の中から生地を選ぶことができる。「BLUEFLAG」のスタッフと相談しながらサイズやパーツ

デザインを細かく決めてオーダーをし、職人の手による自分だけの一着の完成を、次回の開催まで約一ヶ月間待つ。展示に訪れた人はシャツを見たり触れたりしながらそれぞれお気に入りを探していた。(渡邊智美・中村葉月)

心躍る古布の服

熊本県伝統工芸館



2015.8.26-30

吉松かつ子さんによる古布を使った作品や生活雑貨の販売・展示である。主に展示されているのは、古布で作られている服や鞆だ。畳があり、和を感じさせる温かい空間に展示されている。それらは実際に試着することが可能だ。

中でも目に止まったのは、写真にあるあじさいのデザインのトップスとパッチワークのズボンである。比較的短めのトップスに七分丈のゆったりとした個性的なズボンの組み合わせは年代を問わず着られるものである。複雑なデザインだが、驚くほど軽く着心地がよい。吉松さんの明るい人柄と多様な作品たちがレトロな空間に彩りを添えていた。

(藤野育/小柳由聖)

第34回熊日新鋭書道展

2015.7.14-20

熊本県立美術館分館
熊本市中央区千葉城町2・18
TEL 096・351・8411



本展は県下の書道のすそ野を広げ、若手新人を発掘することを目指している。今年開催されている。今年のグランプリの「熊日新鋭賞」に選ばれたのは、必由館高校3

年の鬼塚亜希さんの漢字作品。帛書という紀元前の漢字の隷書体の四行、80字を最初から最後まで乱れず、力強いタッチの運筆で仕上げているのが見事であった。特選には、漢字8名、かな2名、近代詩文書、少字数書、てん刻、各1名が選ばれていた。今年も高校生、大学生の若い世代の入賞が目立ち、斬新で活気ある展覧会場となっていた。(S・K)

第3回天鴻グループ書展

2015.7.28-8.2

熊本県立美術館分館



書家の三島天鴻さんとそのグループの54人が110点の書作品を展示した。今年「くまもと」をテーマに自由な書体、書

風で表現されており、夏目漱石、熊本城等いろんな言葉や詩文があり、楽しい会場になっていた。主宰の三島天鴻さんは「飛」を自由に舞い上がる伸びやかな

Visitor's letter

アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介します

「ポップ・アート 1960's-2000's From Misumi Collection」展

- ・展覧会の工夫に驚きました。小学生の子どもたちにもアートに触れあってほしいという気持ちが伝わってきました。(市内・10代)
- ・ユニークな絵が多かった!!すごい発想力だなあ。(市内・10代)
- ・大きな作品も多く見ごたえがあった。ポップ・アートの歴史というものを感じながら見ることができ、とても刺激になった。(市内・20代)
- ・POPな世界すごい!見れば見るほど面白いです!貴重な体験ありがとうございます。(市外・20代)

「アーティスト・インデックス Scene3」展

- ・初めて拝見する方の作品ばかりですが、それぞれの世界観にのみこまれるような、パワーのある作品ばかりで素晴らしいかったです。
- ・個性がありすぎて見てて飽きませんでした!もっとみたいなあ...

編集後記

社会見学や美術の授業などで来られた小学生から、よくお礼のお手紙をいただきます。習いたての丁寧でたどたどしい鉛筆の文字や、大きな声が聞こえるような「ありがとうございます」の元気な文字を見ると、微笑ましい気持ちになります。色鉛筆でカラフルにいろどられた手紙たちは、先生の手で表紙を付けてリボンで綴じてあったりします。そんな小学生も中学生くらいになると、ボールペンで時候の挨拶から始まる大人びたお手紙を書くようになるのかなと想像して、また微笑ましい気持ちになります。その成長を美術館から見守っていかれたらと思うこのごろです。

編集 大田黒翔代

【執筆者一覧】*原稿の文末にイニシャル表記

- 兼城昌山(S-K)【書道家】
- 森山淡草(T-M)【書道家】
- 岩崎千夏(C-I)【熊本市現代美術館事務局次長】
- 雷澤治子(H-T)【熊本市現代美術館主任学芸員】
- 坂本顕子(A-S)【熊本市現代美術館主任学芸員】
- 芦田彩葵(A-A)【熊本市現代美術館主任学芸員】
- 佐々木玄太郎(G-S)【熊本市現代美術館学芸員】
- 丸吉ゆかり(Y-M)【熊本市現代美術館学芸アシスタント】
- 大田黒翔代(K-O)【熊本市現代美術館学芸アシスタント】
- 塚本春菜(H-Ts)【熊本市現代美術館学芸アシスタント】
- 村上綾(A-M)【熊本市現代美術館学芸アシスタント】

ART KISS LETTER アートキッスレター
 〒747秋号(2015年11月) 【無料】
 発行人: 桜井武
 編集: 大田黒翔代
 デザイン: 石井克昌 (NOTOSHIKI)
 印刷: シモダ印刷
 発行: 熊本市現代美術館
<http://www.camk.or.jp>
 〒860-0845
 熊本市中央区上通町2-3
 電話 096-278-7500
 ファックス 096-359-7892

【次号は新春号(1月発行予定)】

書線で書いていた。中島豊泉さんの「火の国のうた」の大作や、「宇城三味」を書いた橋本真弓さんの詩文書。天井に届くような8メートルの長い作品「小国セリナーデ」の力強い書の石倉尚弥さんの作品。くまモンの歌詞や絵も書いた平川花舟さんが特に印象に残った。(S・K)

熊本イラストレーターズクラブ肥後民話絵本展
 ギャラリーカフェアーク
 2015.8.4-9



根子岳の猫伝説

熊本イラストレーターズクラブ肥後民話絵本展
 ギャラリーカフェアーク
 2015.8.4-9



熊本県立美術館分館

第45回 同光会書展

2015.8.11-16

福岡教育大書道科OB熊本県人会主催の書展である。37人が「書のこころ」をテーマに40点を展示した。自分の書への想いを自分なりの書法で、確かなテクニックを見せて

ターの個性が活かされた作品となっていた。リメイクされた昔話にも子どもたちも親しめるように、という女性らしい優しさが滲み、最後はついホロッときてしまった。まだまだ始まったばかりの挑戦だが、色々な人と関わりながらストーリー(物語)とイラストをコラボレーションさせていく、彼女たちならではの丁寧な活動を今後もぜひ続けてほしい。あわせて、今回の「根子岳の猫伝説」に因んで、猫づくしの手ぬぐいも発売中! 800円(税別)で、当館のミュージアムショップでも販売していますよ!(C・I)

第7回 岩本武士(竹田)書作展

2015.9.8-13



熊本県立美術館分館

元高校書道教師の岩本竹田さんの2年に1度の書展である。今回は、夏目漱石の俳句100首を、扇面に10種の墨を使い分け、それぞれに作品の表情を変えて見せており、見事である。日本人の漢詩として、新井白石の「土峰」や夏目漱石の春の「偶成」等は行草書で見せて

書いていた。江口實穂喜さんは、全紙に淡墨で「〇満」と書き、ユニークな表現をし、調和もうまく見せ、さすがである。久多見久喜さんは、半切に「一心行」と伸びやかにうまくまとめていた。久多見建さんは「平常心是道」を自由なタッチで、うまい構成で見せていた。中野恵子さんは「海」を大字で書き「ことば」を調和よくそえていた。古川宏さん、増永久美子さん、黒田清和さんの書も印象に残る作品だった。(S・K)

第43回 熊本県書道連盟展

2015.9.8-13

熊本県書道連盟(平方研理事長)主催の会員展である。常任顧問から理事までの役員58名、選抜会員66名、一般会員103名が出品していた。役員の仕事群は、さすがに練度も高く観ていて楽しいものがある。併設されていた「物故書作家・卒意の書」には、ペン字も含まれたハガキや書簡で、上田桑鳩、金子鶴亭、木村知石、栗原蘆水、杉岡華邨、津金鶴仙、殿村藍田、梅舒適、日比野五鳳、村上三島等々の錚々たる巨匠の筆跡で、中でも、福岡の前崎南嶺氏宛の殿村藍田と津金鶴仙の毛筆13通、ペン字2通の書簡が実に魅力溢れるものであった。研修部のご努力に敬意を表したい。(T・M)

熊本県立美術館分館

いる。高倉健さんのことば「最高のものは、一回」と詩文書で力強く大書したり、「元元」とたくましい線質で見せており、自分の好きなことをコツコツ続けることが大切である。と示していた。書体、書風も考えて、多彩な表現であり、ユニークな書展となった。(S・K)

第40回記念城心会書展 明詩・高青邱とその周辺

2015.9.29-10.4

熊本県立美術館分館
 尚綱 大学
 副学長を務めた名譽教授の江口幹城氏率いる城心会の40回記念書道展である。会長以下46名が、今回のテーマ「高青邱(高啓)を中心とした中国明時代の漢詩」を主として行草体で発表していた。県書道界を長年リードして来た会長の作品が光彩を放ったのは勿論、12名の理事の出品作はさすがに安定感がありレベルは高い。書風に変化が欲しいと求めるのは社中展としては酷かもしれない。注目すべきは参考作品の数点である。先ず会長の福岡教育大学卒業制作展出品作である。若年にしてそのレベルの高さは驚きである。それと、義父で上田桑鳩門弟の江口雲峰氏の「崔子玉・座右銘」の練度の高い柔らかい線質が印象に残り、更に福教大の恩師・横田小竹氏と日本芸術院会員・古谷蒼韻氏の書簡の魅力は圧巻であった。(T・M)



STANCE or DISTANCE?

わたしと世界をつなぐ「距離」

「STANCE or DISTANCE?」展
展覧会オープニング

2015.10.10-12.6

「距離」とはどのようなようにして生まれ、感じたりするものなのでしょうか?本展では、「距離」が存在するからこそ、客観的に自身自身を見つめたり、家族や友人など周りの人々と向き合ったり、そして社会の問題や世界での出来事について考えることができるのではないかと捉えています。この物理的、心理的「距離」によって、自分自身の「立ち位置や姿勢」が形づくられることをテーマに、世界7か国、17組の科学者やアーティストによる作品をご紹介します。

オープニングの日は、本展の新作制作や展示のために滞在していた渡邊淳司+安藤英由樹さん、藤井直敬+GRINDER-MAN(タグチヒトシ、伊豆牧子)さん、林智子さん、加藤泉さん、金川晋吾さん、大野智史さんの9名の研究者・アーティストが開会式に出席されました。

展覧会では、最先端のテクノロジーを用いたメディア作品から、3メートル以上の巨大彫刻群、12メートルの大迫力の絵画、そして国内の美術館では初公開となるミカ・ロツテンバーグ(エルゼンチン出身、ニューヨーク在住)、リー・プラザーズ(ベトナム、フエ出身)の映像作品まで、多様な作品によって、「距離」について感じ、考える作品を展示しています。(A・A)

「STANCE or DISTANCE?」展
アーティスト・トーク

2015.10.10

【第1部】林智子、大野智史

アーティスト・トークの第1部として、林智子さんと大野智史さんにスライドを交えつつお話しいただきました。林さんは人間の五感や親密さが生まれる背景をテーマに作品を発表してきました。これ



までの作品と、出品作品である遠距離の人間同士を光の触れ合いによってつなぐ体験型作品《Mutsugoto》や、本展のために阿蘇の火山研究センター協力のもと、祖父の足跡を辿るリサーチを重ねて制作し、時間的、物理的距離を浮かび上がらせた

《Distance-Aether》についてお話しいただきました。

大野さんは、絵画の美術史的文脈を踏まえて、オリエンタリズムに回収されないうちに、どのようなスタンスやコンセプトで制作されてきたのか、また科学と芸術の関係についてこれまでの作品を振り返りつつお話ししてくださいました。本展で展示されている新作の《Self-Portrait-Funny Smile》のお話では、現代社会のなかでの人間の振る舞いについて語っていただきました。(A・A) 【参加人数30人】

【第2部】渡邊淳司+安藤英由樹、藤井直敬+GRINDER-MAN
第2部では、体験型作品を出品いただいた

いている2組に作品を前にお話しいただきました。

認知科学者の渡邊淳司さんと情報科学者の安藤英由樹さんは、3作品を出品されているのか、自分の視点と第三者のデータ収集による視点で自分を知る《Avatar in their lives》



自分の心臓の音を聴診器で聞きながら、感情移入のようにスクリーンに登場する人物に対して自らの心音を通して心情を重ねていく《心音移入》など、自分という自律した存在と情報がどのような影響関係にあるのか、その距離感を測る作品について解説いただきました。



脳科学者の藤井直敬さんとパフォーミンググループGRINDER-MANのタグチヒトシさん、伊豆牧子さんは、本展のために《The Mirror》を制作されました。本作は、自己と身体をつなぐテーマに、SR(代替現実)技術と体験者自身の鏡像認知能力を組み合わせた、没入体験型の作品です。今、自分が見ている景色は現在なのか、過去なのか、あるいは仮想のものなのか。テクノロジーの発達によって視覚情報が操作できつつある現在、自分が見ている世界を果たして脳はどのように認識しているのか、作品の仕組みとともにお話しいただきました。(A・A) 【参加人数40人】

「STANCE or DISTANCE?」展
金川晋吾《Father》
上映&トーク

2015.10.11

出品作家の金川晋吾さんが制作する

《Father》シリーズの映像作品上映後、ご本人に作品について語っていただきました。この映像作品は、金川さんが失踪を繰り返してきた父親を撮影した写真作品《Father》が本として出版されることになり、父親をテーマにすること、そして父親が撮った約1300枚にのぼる写真を掲載して良いか、世の中に出すことをどう思うかを確認するための父親との会話を撮影したものです(構成、撮影、編集…西澤諭志)。上映後のトークでは、家族を題材にすることについて、金川さんは「つながりを求める部分はあるが、コミュニケーションをしているわけではない」「他者として扱い、自分とは違う存在とどう対峙するか」という視点で、父親と向き合っていると語られました。また、周囲の物事に興味がない父親を撮影することについて「内面のやりとりを必要としない写真を撮るという行為によって、不毛なやりとりを繰り返さない。」とも語りました。父親と息子、という立場があっても、それは他者であるという姿勢で発表される金川さんの作品は、展覧会のテーマでもある「隔たり(Distance)」があるからこそ人と繋がれる。自分の立ち位置(Stance)で人との距離が伸びたり縮んだりする」というメッセージに共通する、人との距離の取り方の一つの象徴といえるかもしれません。(H・T) 【参加人数35人】

